The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	續・若き日の天囚
Author(s)	後醍院, 良正
Citation	懐徳. 1966, 37, p. 59-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90422
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

續・若き日の天囚

後醍院良正

まえがき

西村天囚博士の主唱により、懷德堂が重建されたのが大正五年十月十五日、今年で五十周年を迎える。天囚師は明治四十三年から翌年にかけて、大阪朝日紙上で、「懷德堂考」上下を八十數回にわたって連載し、まず廣報活動につとめ、四十四年十月五日には中之島公會堂で懷德堂の祭典を催し、先賢を祀った。その時集まった寄付金の殘額七千圓を基礎に重建をはかり、五年後に願望を達することが出來た。

重建當日の記念式では、博士は「懷德堂の由來と將來」と題して講演を試み、大阪市民に學德の必要性を力説した。筆者はこの記念すべき年を迎え、「續・若き日の天囚」の筆を執ることにした。

老莊思想に託して

明治二十年、天囚は二十二歳を迎えたが、彼はそのころ老子、莊子を愛讀し、この思想にもとづいて當時の社會を批判し、これを「活髑髏」なる小著にまめた。本書は翌二十一年一月、おなじみの博文堂から出版（五六ページ、定價二十錢）されたが、この本により、天囚若き日の思想の一端をうかがうことが出來る。天囚は老莊思想に心醉したとは思えぬが、彼もまた一青年として懷疑的な思想にかられたのであろう。眞理を求めながらも、容易にそれを捕捉

し得なかった。懷疑のままに、自らの社會批判を試みたのである。その例言の一節を引用しよう。

余は日比好んで老子と莊子を讀みしが、此書を草する時、二部の書が冥々の間に手傳ひしかと考へらるゝなり。否余の腦裏に假住居しける老莊二氏の不平話が、余の筆先の旅興に乘りて、白紙の上に發足しけるにやと怪まるゝなり。（中略）老莊二氏の魂魄が余に麻眊（もう。くらむ）劑を與へて、其間に筆先の戲を爲しけるよとも思ひしが、又能々考へ見れば、文章の拙さ、思想の幼さ、矢張天囚居士の筆と外には見へず。（後略）

例言のつぎに七ページにわたる緒論をつけているが、まず「社會の腐亂甚し」の項では――

外德義を唱へ、陽忠信を說て而て其内を察すれば勢を慕ふて其親を忘れ、利を求めて其友を棄て、口自由を稱し、舌民權を論じ、而して其行を觀れば權門是れ趨り、黃白是れ拜す。大官の人夜宴に蹈舞に、日夕榮華を事として人民の凍飢に泣くを知らず。

と、社會の矛盾を衝いている。ついで治外法權、不平等條約等による日本の獨立国としての虛名に對し、「彼れ我を視ること兒孩の如く、土芥の如く、動すれば輙ち耽々（たんたん）として涎を蜻蛉（せいてい。とんぼ）の首尾に垂れ、我を奴隷の域に擠（おと）さんと欲す。」と慷慨の氣に燃えている。凶作つづき、減租の聲など国内の疲弊を訴える筆は鋭く、自由民權を叫ぶ壯士も、貧民を救うに足らずと斷じている。

結局あれも駄目、これも駄目、遂には生に安んずることをあきらめ、「死なん哉、死なん哉、死は吾希ふ所なり。死は吾樂しむ所なり。死を希ひ、死を樂むに至ては、彼の世上の利名富貴將何の用ゆる所之有らん」と、死を賛美するの言まで吐かせている。

本文は秋草の上に坐する髑髏が、宙に迷う魂魄に過去の樂しみを語り出すところからはじまるが、天囚の意圖は、この現實から離れた、魂魄を借りて、心のわだかまりを吐き出し、人間世界の不可解をえぐり出すにあった。そこには信ずべきもの何ひとつ無く、虛無觀に終始しているように見える。孔子に對してもつぎのように叙している。

彼の姦夫の子厚顔の僞君子なる孔丘は道德の僞物を以て世人を不忠不孝の間に助けんと欲する者なり……世人以て賢人と爲し聖人と爲し、識者學者と爲し、功業非常の士と爲すを以て、今假に之に從ひ、天帝を以て大慈大悲を喜ひ、至仁至愛を好むと爲さば則必ずや此數子者の生命を延ひて(ママ)今日に至り、以て世人の苦患を救ひ、社會の功業を興すや必せり。然れとも今や則屠戮殘殺一の餘す處なく、而して數子者の骨腐朽敗爛、化して一片の土と爲るのみ。

僞聖僞智の人一たび世に出てより道雜って而して事多く、事多くして而して世擾る。世擾れて而して民憂ふ。民憂へて天下の亂救ふ可らず。（後略）

天囚の結論としては、一切の「文飾」すなわち、位官爵祿、文學技巧、音樂舞蹈、道德法律、金銀珠玉、郵便電信、鐵路汽船に至るまでの文明よりも、食に飢える貧困を根絶するのが先決であると考えていた。「團子は則人生存々の重寶に非ざるか。」と說いた。換言すれば「原始に還れ」の考え方に通ずるものがあった。

國民の奴隷根性を衝く

天囚は、翌二十一年四月には、「奴隷世界」という一書を著わした。本書は、本文一五七ページ、定價四十錢で發行人は松下軍治である。松下は、早くから新聞發行に志し、三十二年ごろには「やまと新聞」の社長などをした人物だが、「屑屋の籠」で名聲を博した天囚に眼をつけ、この出版に乘り氣になった。

天囚は、既に前年の暮に脫稿していたが、日ごろ兄事する志賀矧川（しんせん、本名重昂。地理學者として著名、二十七年出版の「日本風景論」の名著がある。）を訪ね、作中に批評文を添えてもらうように賴み、また學友の瀧川君山にも酒間に原稿を見せて忌憚なき評を求め出版することに決めた。

「奴隷世界」の目次は總論「奴隷根性」第一回「名譽の奴隷」にはじまり、黃金の奴隷、娥眉の奴隷、文字の奴隷

威權の奴隷、風潮の奴隷、結論として「国を擧げて他邦の奴隷たる勿れ」を論じている。

「矧川曰、蓋是一篇之本領」と評された總論の一節をつぎに引用しておく。

其身自身が自身の爲に奴隷使せられるに至っては、人も亦隨て之を奴隷使せんとするは數の免れざる所にして、所謂先づ腐れて虫之に生ずる者なり。国とても其国自身が奴隷の地に立たずば、などて外国の爲に奴隷にせられんや。故に国外邦の奴と爲るは、其国自ら之を招くなり。人他人の奴と爲るは、其人自ら之を取るなり。然れども国にしろ、人にしろ、其奴隷根性を養ひ來る所以の原因は必ず同一の軌轍（きちょう）に因て進みたるに疑ひなし。如何んとなれば、人もて集り作れる國にしては、國は人の集合體なればなり。去らば、其の国の奴隷心を除かんと欲せば、其國民の奴隷心を刈らざる可らず。……まづ其國民自身が、自身の爲に自身を奴隷使するの病より洗滌刈除せざる可らざるなり。

「黄金の奴隷」では「利は天下の寶なり」と前提しながら、むやみやたらに貪るのみを知るものをいましめながらも、「彼の顔回を氣取り、伯夷叔齊を氣取りて陋巷に貧乏暮しながら辭を古道に托する者は余の取ざる所なり」としている。矧川はこの章に對し、黄金の力が政治社會に及び惰落をもたらす點に觸れなかったことを遺憾とするとの漢文の評をつけている。

「娥眉之奴隷」は當時の男性がいたずらに遊里に遊び、妻子を顧みぬ世相を慨嘆し、「文字の奴隷」では、學者がいたずらに空理空論をもてあそぶのを非難している。

天囚は、當時の文明開化が全國に風靡し、國を擧げて外國の奴隷化となる日本の姿を目前に見るにしのびなかった。從って本書の結論として、「交際の道には別に干腎干要の道あるにも拘らず、徒らに夜宴を張り、舞蹈を習ひ、挑韃（ちょうたつ。輕くはねおどる）以て目前の急を忘る者は何ぞや」と歎じ、人情風俗の異なるにもかかわらず、他國の模形に終り、國民の福祉を圖ることなく、他國の歡心を買うことに汲々たる國政を眞っ向から非難攻擊してい

るのである。

奥羽へひとりたび

この年六月、天囚は俗塵から逃れて、瓢然として奥羽地方に一人旅に出かけた。その紀行文は「奥山羽水」と題されて「紀行八種」（明治三十二年刊）の巻首を飾っているが、その書き出しに「都の月は何となく巷の塵に掩はれがちなり、……いでや袖（そま）の通路（かよいじ）を蹈み、賤が伏菴（ふせいお）の烟をも詠めて、日來の鬱を慰めんとて……」とあるが、身軽ないでたちで、九日に上野驛から出發した。

翌日は仙臺で下車、大學時代の友人宮川子嚴の家に三日滯在。友人を集めては、酒を酌み、詩文を作った。「宿酲（てい。ふつかよい）猶眉睫の間に留りて、頭重きこと山の如く」と記しているように、天囚は酒豪ぶりを發揮し、大いに豪放に振まった。

十三日は雨のそぼふる中を子嚴の宅を辭去し、約三里の道を歩き、愛子（あやせ）村に來た。ほととぎすの聲をきき、ふと天囚は故郷の母に思いを馳せ、感傷的になった。

游子駐筇（きょう。竹杖）愛子村、杜鵑啼血幾消魂、豈唯風雨征袗（しん。ひとえ）濕、雙袖不堪多涙痕。

天囚は、このあと、作並溫泉、關山の洞門、谷地を訪れ、成齋、篁村門の學友槇羽南の許へ身を寄せた。

或時は山に登り水に臨み、或時は毫を揮ひて詩を寫し、又は新知の人々の徵逐（詩文を作り酒を飲み、招いたり、招かれたり。）に應じて、文酒の會に暇なし

と、あるように、半月はまたたく間に過ぎ、この邊で東京に歸ろうとしたが、羽南の紹介で新しく森谷釣矼（ちょうこう）に引きとめられ鯉や鮎の珍味に天囚の酒は、はずむばかり。東京を出てはや一月。最後に浮島の奇勝を見物して東京に歸ってきたのは、七月十五日であった。

尺八の門つけに失敗

奥羽の旅から東京へ歸ってきたものの、金は無し、天囚の貧困生活はつづくばかりであった。その年の八月、遂に親友瀧川君山あてにつぎのような金の無心の手紙を送った。

近來梨の礫鐵砲玉トント返事も聞カス
扨廿日迄ハ大戰爭苦シイ苦シイ十九日頃迄2丈平ニ賴ム返サレヌ事ハアルマイ是非賴ム南無賴ム重野ハ歸ル仕事ハ多シ借金ハ來ル慈悲じや情じや
おどけと思ひ玉ふナ返事ヲ待あなかしこ

書中に2丈とあるのは、二圓だけの意味である。「碩園先生追悼錄」の中で、君山はこの手紙を紹介し、「窮迫此くの如し。而して其文字洒洒落落、妙不可言。窮書生の胸中自ら閒日月あり。」と述べている。

それから一月ばかり經ったころである。畫家の山内愚仙とともに、神田駿河臺の方に下宿を移したが困窮の度は增すばかり、ふろ錢にも事缺くというどたんばまで追いつめられた。二人は思案投げ首で、どうすることもできない。その時窮餘の一策を案じだした天囚は、「おい愚仙、君は尺八を吹くじゃないか。今日、夕方からひとつ戸外に出て、吹いてまわったら、ふろ錢ぐらいかせげよう」といった。

その夕方、二人は下宿を出た。愚仙が尺八を吹き、天囚が錢をもらうといふ役割である。二人はなるべく人目につかぬ淋しい道を選んで、軒下に立った。と、ある黑門構えの優雅な邸宅の前に來た。その時、その邸宅の窓から思いがけなくも、女のやさしい聲が聞えた。「尺八屋さん」。

天囚はそれ來たとばかり、愚仙を手招いた。夜目にもうつくしい、たおやかな手が、天囚の手に二十錢銀貨を渡し

ている。注文は「越子獅子」の曲だったので、愚仙は、わけなく吹けると思って唄口に唇をあててみたが、唇がふるえて音が出なかった。愚仙の頭には、乞食までして尺八を吹く情けなさがあった。そこで天囚に「おれはこんなことは出來ない。やめる。」といったので、天囚も「そうか」とあきらめて、窓口に引きかえして、今受けとったばかりの銀貨を投げ返し、さっさと二人は逃げるように立ち去った。ホッと一息つくと、天囚は「おい愚仙、おれたちはまだ乞食は出來ないなあ」と、笑い合った。

中仙道の珍道中

天囚、愚仙の二人は、も早や東京で暮す道がなくなった。尺八事件があって三日後、兩人は東京を立って中仙道の旅に上ることに決めたが、勿論旅費などあろうはずがない。また瀧川君山を煩わす結果となった。

君山が自分の原稿料を受けとるため、本郷森川町に、ある雜誌社を訪ねると、入口から走って出て來た大男がいる。單衣に菅笠、手にゴザを持つ、天囚の旅出ち姿であった。君山の顔をみると、「おれは江戸を食いつめた。これから中仙道を經て京都に行く、貴様の原稿料はおれが代りに受け取った。餞別としてくれ」と、やぶから棒のあいさつである。

君山はしばらく待つように、引きとめたが、「愚仙が坂の下に待っておる。あとは手紙だ」とばかり言い棄てて飛ぶようにして別れて行った。

九月六日の夕方、天囚と愚仙は、弟の時輔に見送られて上野から汽車に乘った。この旅行記は「雲の行方」と題して、前記の「紀行八種」の中に收められているが、つぎのように書き起している。

世の憂事（うきこと）をしのぶ摺、陸奥の旅より歸りてこのかた、都のただずまゐいとわびしく、夜も夢だに結びあへず、七夕祭（たなばたまつり）もすみてやうやう夜寒になるほどより、四面楚歌の聲は一身に集りぬ、天道は

いざ知らず、戰の罪に因りて垓下（がいか。漢の高祖、楚の項羽を圍みし處）に陷りし我身、今は是迄なり、あすよりは都の塵をよそにして雲のゆくゑに身をやまかせんとて旅の用意する折、兼ねて深く交れる山内愚仙も、諸共にゆかばやと云ふ、愚仙は洋畫に巧にして、余が著作の挿畫も其手に成れり、尤寫景に妙を得たれば、此は好き同伴なり、文畫の道は變れども、何れも同じ筆の命毛、（いのちげ）行方定めぬ同行二人、今日は必ず打立んと二人三人の朋友に別を告ぐるに、例の氣まぐれもの珍らしからずとて、袖引止むるものもなければ中々に心安し、中に旅の用意は如何にとて風呂敷包引ほどきしものあり、韓蘇詩抄二册と筆硯の外に一物なかりければ、ひたと呆れて物も言はず、兵法に言はずや糧に敵に因ると、山靈水伯の待ち給はんに、いざとて明治二十一年九月六日の夕間暮、上野より汽車に乘る。（後略）

その夜は、宇都宮の旅宿に泊り、翌朝、同縣人の小野昌速を訪ね、非常なもてなしをうけ、雨降るままに滯留し、一四日の朝、目當てにしていた餞別ももらい、旅費も調ったので出立することにした。天囚車中の放吟につぎの一首がある。

翩々（へんぺん。輕く擧る貌）矣彼都人士、役々畢生爭青紫、（漢代の制、公侯の印綬は紫、九卿は青。高官の義）唯知人間有膏粱（こうりょう。うまき食物）不知天山有山水、齷齪慚吾與之居、短筇野服拂袂起、山自高兮水自流、

間雲野鶴去悠々。

横川で汽車を捨て、鐵道馬車に乘りかえ、信濃路にはいった。愚仙は淺間の夕景に見とれて、寫生にとりかかったので、その夜はやむなく輕井澤の怪しげな宿に泊った。

翌々日、望月から和田峠の山路にかかったころ、二人は足が痛み出し、馬を雇ってこれに乘った。ところが、巨體の天囚と愚仙の體とが均衡を失い、鞍がするすると馬の横腹に垂れ、兩人は眞っさかさまに落ちた。天囚は、「よき大將と引組みての此狀（このさま）ならば兎も角、愚仙が上に落重（をりかさな）りての見苦しさ、怪我なきこそせめ

てもの幸なれ、とて苦笑しゝ又も乘る」と述べている。十六日早朝、和田峠の頂きにある旅宿を出發し、諏訪湖を眺めるところに出た。天囚の文に從うと——

四山環繞の中に油を漾えて翠黛の粧を照す。左手なる連山の一角より遙に芙蓉の八面玲瓏たるを見る、其左に逶迤（いい。ななめに行く貌）たるはなまよみの甲斐の八ヶ嶽なり。

と描寫している。

十七日には上諏訪を經て鹽尻に宿をとる。十三夜の月がさやかに野山を照らしていた。愚仙は尺八をとり出し「九州鈴慕」の一曲を吹く。天囚の心にもしみるものがあった。強氣の天囚も「常には山河を跋渉して英華の氣を吸ひ、昂然として野鶴を學べる身も、月見ては心弱りぬ」と記している。

いよいよ木曾路である。越後屋という旅宿の主人藤兵衛は好事家で、愚仙に肖像畫と、天囚には紙筆を出して揮毫を求めた。この主人はその後も、年に一度くらいは大阪に出かけ、兩人を訪ねていたという。雨にたたられ、この宿を後にしたのは二十二日であった。木曾川に臨む枕水楼に泊った。「今は九月の末にして他處は殘暑なるに、此處は早や霜見えて、朝夕肌寒し、予等は一重にシャツ一枚にて身振しつゝ酒を借りて何ともなき裝を爲すこそゐられけれ」とあるように、夏姿の天囚等は見る目にあわれであった。

この姿を見かねて、ある女が親切に丹前を一枚わざわざ縫って餞別に贈った。たとえ二人に一枚の丹前でも兩人にとっては感極まるものがあった。

その後、天囚等は福島にある、鄕學の跡「菁莪館址」や狐法師の傳說のある興福寺を訪ねたりしたが、木曾の景勝には、さすがの天囚も「予の淺才、豈拙作を以て此の靈境を汚す可けんや」と筆執ることをはばかり、後日の思い出の種に、つぎのような「まり歌」を作った。

一ツトヤ　人はつはもの木は檜木曾の名物見せたやな見せたやな（以下畳句おなじ）

二　古き名所は桟橋（かけはし）やうすぎぬひたるあさ霞

三　宮の腰にひゞくなり德音禪寺の暮の鐘

四　與川の月の影すみて秋の景色のおもしろや

五　何處を吹くや風越（かざごし）の晴れし嵐の長閑（のどか）なる　（以下略）

漢詩も十首ばかり作ったが、つぎにその中の二首を再錄しておく。

古寺楼臺半夕暉、（き。ひかり）鐘聲隱々落溪扉、淡烟輕鎖秋風路、獨木橋頭拾栗歸。

溪聲盡日伴凄寥、倚檻何妨酒氣消、紅葉青山渾（ひとしく）似畫、逐牛人渡夕陽橋。

木曾山中の人情風俗は太古さながらのおもかげがあると聞いていたので、二人はそれを探索に出かけた。路傍の民家をのぞくと、一人の老女が赤ん坊を背負って爐べりにうずくまっている。二人はつかつかとはいり、爐にかけた鍋の中身をたずねると、南瓜と馬鈴薯であった。これが山に出かけた主人の晝食だという。この家を出て、空腹を感じたので、また一軒たずね、食物はないかと聞いた。四十歳ばかりの女と四、五人の子どもが爐を圍んでいたが、栃の實の外には食べ物はないとの答えだった。天囚は杜甫の詩の「日拾栃栗隨狙公」（そこう。猿を養う者）の句を思い起していた。その女の姿もおどろくべきもので天囚はつぎのように記している。

女のおどろなる髮面を掩ふて、根は布の片もて結び、頸の邊は眞黑にして塵垢（あか）は小刀もて削るべし、上に麻の廣袖なるを着て、下に襤褸をまとひ、麻繩をもて帶となし、脛より下は露（あらは）なり、其言葉は單純にして、予に物語ると、吾子に物言ふと異るなく、茶を飲めとて進むる湯は、少し褐色を帶ぶるに似たれども、風味白湯に異るなし、如何なる草の葉をや煎るらん。

やがて二人は、福島を後にしたが、日に日に寒さに向かう。二人は一枚の丹前を交代に着て歩く珍道中であった。どうやら食いつないできた旅費も心細くなり、遂に中木曾の中津川という所に來た時には旅金は盡きてしまった。幸

い愚仙が中津川の郡役所で地圖に使う繪を賴まれ、僅かながらの報酬を得たので、この金をもって天囚が先發し、名古屋で金策することになった。

殘された愚仙は天囚を待つこと五日間、宿屋では行燈部屋におしこまれるという始末になった。懷中わずかに二十二錢。ままよと許り、愚仙は宿屋を飛び出し、途中橋錢にもこまり、郵便切手で堪辨をしてもらうというような旅をして名古屋に出て來た。

一方、天囚は、東雲堂を訪ね、端唄の評釋を漢文で書く約束をして、いくらかの金子を得ることができた。これが「閨怨」と題して出版された小型の本である。この間の事情については、天囚が京都に着いてから、君山あてにつぎのような手紙を出している。

名古屋に著きたる時嚢中一物なし山内愚仙をして一書肆に至らしめて云先頃來某旅館に東京の大家西村天囚先生滯留し此の地にて筆硯に從事せんと欲す貴肆にて出板を引受呉れずやといふに書肆も『屑屋の籠』にて我が名を知りたりけむ快く引き受け呉れ多少の原稿料を得て漸く京都に到ることを得たり云々。

京都入り

天囚、愚仙の兩人は、いよいよ京都入りとなり、柊屋旅館でわらじを脱ぐつもりであった。ところが宿の玄關に立ったみすぼらしい二人の旅姿をみて、ていよく斷られた。「あなた方のお泊りになる宿屋は三條大橋を東へ渡ったへんにありますえ」と、親切やら侮べつやらわからぬ女中のあいさつであった。これも無理のないことで、時候はずれの、しかも垢じみた單衣を二枚重ねた男と、丹前を着た異樣な風采の男がにょっと立ったのだから、さだめし驚いたことであろう。

この時、天囚少しも騷がず、ひるむことなく、自分は重野成齋先生身内の者。また愚仙は、當時長崎縣知事日下某

の親戚であるとふれこんだので、柊屋でもしぶしぶながら座敷に通すことにした。

柊屋に泊りこんだ天囚は、すっかり腰をおちつけてしまった。しかも宿賃は持たぬばかりか、小遣錢まで宿屋に借りて遊興にふける有様だった。始終天囚の面倒をみていた博文堂主人の原田が語る當時の天囚は、つぎのようである。

その後、私も京都へ行って俵屋に泊りましたが、私の宿の者が「もう四十日程前から毎日の様に柊屋から使が見えます」と申しますので、誰かと思って行って見ると、二人が汚い装ひして小さな部屋に陣取り「君を待つこと四十日」とばかり「さあ遊びに連れて行け」といはれるのです。私もこれには少からず面食らひましたが、聞けば柊屋主人の弟や、美人で評判の仲居お鶴さんなどが、この二人にスッカリ惚れ込んでいろいろと面倒も見、宿賃から小遣錢まで七百圓ばかりをこのボロ書生に立替へてゐました。（大正一三・八・一、大阪朝日所載）

さゝ浪新聞に迎えらる

そのころ、滋賀縣の大津では、縣知事の中井櫻洲（鹿兒島縣生まれ、明治維新の志士）が出資して「さゝ浪新聞」を發行していた。（明治二十一年四月創刊）櫻洲はかねてから天囚の文章にあこがれ、折あらばぜひ一度會いたいと願っていた。その仲介に立ったのが博文堂の原田で、彼の手引きで櫻洲と天囚は胸襟を開いて語り合う機會に惠まれた。これが縁となり、天囚は「さゝ浪新聞」に招かれ、新聞記者としての第一歩を踏み出した。

櫻洲は地方長官としては變り種で、新聞經營に乗り出したが、社論も經營方針も一切、新人の天囚にまかせ、かえってそれが功を奏して新聞の評判もよくなった。（「上野理一傳」に據る）。

はじめて職を得た天囚であったが、豪放の氣は失せるべくもなく、收入より散ずる方がいよいよ多くなった。愚仙の思い出の中につぎのように記されている。

「何でも愚仙を驚かしてやるから、俺が迎えにやったら、直ぐその車で來いよ」と命令的に言ってゐたから心待ちしてゐると、果して迎えの車が來た。聞くと先斗町の柊屋（青楼の名）からといふことである。訝りつつも行って見て驚いた。三階の一間に二十幾人の妓が天囚を圍繞して處狭き有様である。私は度膽を抜かれたが、飲むことは兄にひけをとらなかった。とやかくする中に「オイこれから行かう」と一令を天囚兄が下すと、總勢の車が用意された。その車は先斗町の入口——四條大橋から三條大橋の手前の畜生寺の邊まで、殆んど二町許りの長さに列んでゐた。これが繰り出されて宿屋の柊屋に歸って行ったが、妓達の下りてしまった後から、我々二人が悠然と車を下りて入って來たので、柊屋の主人は何人の入來かと迎へてゐたのであったから、二度吃驚したといふことである。

（「碩園先生追悼錄」より）。

大阪朝日新聞に入社

翌二十二年六月、天囚は大阪朝日に迎えられ、同社で發行していた僚紙「大阪公論」の記者となったが、これが彼の生涯を大阪朝日に獻げる端緒となったのである。

「大阪公論」は同年一月三日創刊で、發行編集人は上野理一、主筆は織田純一郎であった。國會開設を翌年に控え、市民の政治意識を高めるための、いわば政論新聞であった。しかし、高邁な理想を掲げたこの新聞は、庶民にはあまり硬派に過ぎ、遂に小説を載せることによって緩和の道を開いた。文才豊かな天囚の働きはめざましかった。元來漢學の素養があるばかりでなく、流麗な和文にも長じていたので、小説、紀行、戯曲などを巧みに書きこなした。

天囚の小説が公論にはじめて掲載されたのは、二十二年六月十五日で「天囚雜綴十種」其一「天緣」であり、以來次から次へと連載されたが、公論は二十三年五月二十五日をもって廢刊になった。そこで天囚は「大阪朝日」の編集

局員になった。公論に連載した「維新豪傑逸事」は、その後補筆して一書にまとめ、「天囚聞書維新豪傑談」（一七五ページ、東京春陽堂發行）として翌二十四年八月に出版されている。